

## 七夕・月見の 2023 年度他館連携事業 ～川崎市立日本民家園と青少年科学館を事例に～

真保 元\*・内藤 武\*\*

Tanabata and Tsukimi's FY2023 Collaboration Projects with Other Museums  
～Kawasaki Municipal Museum of Japanese Folk Art and Science Museum for Youth as a Case Study～

Hajime Shimbo\* and Takeshi Naito\*\*

### はじめに

川崎市立日本民家園（以下、民家園）と川崎市青少年科学館（以下、科学館）は、例年 7 月の七夕と 9 月の月見のイベントを、他館連携事業として実施している。本稿では、これまでの七夕・月見のイベントを簡単に振り返った後、2023 年度の七夕と月見の連携事業について、報告を行う。

### これまでの七夕イベント

冒頭でも述べたとおり、これまでも七夕イベントは民家園と科学館の連携事業として行われてきていた。記録を遡ると 2016 年度より連携事業として行われているようである。

そこで、民家園が行ってきた、これまでの七夕イベントを簡単にではあるが振り返っておきたい。

民家園では民家の中で一年間のうちに行われている年中行事を聞き取りデータから再現し、年中行事展示を行っている。ここでは年中行事展示自体の変遷を確認することは避けて別稿に譲り、七夕展示の変遷について整理を行う。

記録写真を遡ると、2010 年のものがあり、この当時既に北村家で七夕イベントを行っていることがわかる（図 1）。会場は園内工事などの事情により、年度によっては佐々木家で行うこともあった。なお、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）が 2020 年頃から世界中に蔓延し、博物館でもイベントの取りやめが相次いだ。民家園の七夕においても例外ではない。コロナ禍前の 2019 年度の段階では、来園者に短冊飾りを折り紙で作ってもらう「七夕飾り作り体験」を民家園内で活動している囲炉裏の火焚きボランティア「炉端の会」メンバー・博物館実習生と共同で行っていた（図 2）。

コロナ禍になり、民家園内の各種イベン



図 1. 2010 年度の七夕（北村家にて）



図 2. 2019 年度の七夕飾り作り体験の様子（北村家にて）

トが縮小・廃止されていくなかで、この飾りつけ体験も無くなった。

その他、民家園では市民団体である民具製作技術保存会が活動している。わら・竹・機織りの 3 グループがあるが、そのうちの機織りグループと 2017 年度から連携し、「七夕の機織り体験」という機織り体験のイベントを実施している。コロナ禍により 2020 年度からは中止となったものの、後述のように 2023 年度は復活させることとなった。

科学館では、主に子供向けにプラネタリウム特別投影「七夕ものがたり」を実施して

\*川崎市立日本民家園 Japan Open Air Folk House Museum

\*\*川崎市青少年科学館（かわさき宙と緑の科学館）Kawasaki Municipal Science Museum

いる。コロナ禍の2020年以降も状況に応じて席数を制限することはあったが、継続し、加えて2021年2022年は七夕に合わせて解説動画を制作し、SNSで発信した。例年、プラネタリウム観覧者にオリジナル短冊を配布し、これを民家園に短冊を持参すると七夕飾りに参加・体験することができ、ミニ笹をプレゼントするという取組を実施してきた。

### 2023年度の七夕イベント

2023年度の事業内容としては、科学館が七夕向けプラネタリウム投影・短冊書きおよび飾り付け、民家園が短冊書き・飾り付け体験・ミニ笹配布・民具製作技術保存会による子ども向けの機織り体験である。実施日として科学館が7月1日(土)・2日(日)両日行ったが、民家園は2日のみ行った。

七夕の日は7月7日であり、今年は金曜日であった。だが、博物館の集客を考えるうえで、平日よりも土日祝日にイベントを開催することが望ましく、七夕の実施日は例年7月7日に一番近い直近の土曜日・日曜日に行うこととなっている。そのため、今年度の開催は1日、2日であった。なお、直前の6月30日(金)には、科学館の職員が民家園内で短冊飾り付け・ディスプレイ用の竹を切った。

まずは、民家園における事業の整理を行う。短冊飾り付けは北村家、機織り体験は原家で行った(図3)。タイムスケジュールとしては、短冊飾り付けは11～15時、ミニ笹配布は11～16時である。機織り体験は10時30分～12時、13時～14時30分の二部制で行った。なお、短冊飾り付けがミニ笹配布よりも1時間早く終了するのは、飾り付けのために地面に寝かせていた竹を立て、展示するためである。

当日は民家園が猛暑となり、思うように客足が伸びない場面もあったものの、七夕会場の北村家には大人・小人あわせ150名ほどが訪れた。このほか、機織り体験は子ども向けプログラムのため、保護者とあわせて1組と計測したところ、定員50組のうち26組の参加者が集まった。

科学館との連携事業としては「ミニ笹配布」がある。科学館の七夕特別投影の際に配布される短冊を民家園内の会場で提示した来園者には30cm程度に切ったミニ笹を配



図3 2023年度の七夕飾り(北村家にて)

布した。これは自宅でも短冊を飾り、鑑賞できるようにするものである。

続いて科学館側の報告になる。科学館では、7月1日・2日の2日間に七夕ものがたりを合計4回投影した。当日観覧券は完売となり、合計600名が観覧した。また、観覧券購入の際に科学館マスコット「かわさきぷりん」と民家園マスコット「みんかっぱ」等が登場するオリジナル短冊を1人1枚ずつ配布した。短冊は、2日に民家園で実施する大笹の飾りつけやミニ笹配布の笹に飾ることなどへの利用を想定し、生田緑地内の各施設の回遊性向上を狙った取り組みである。上記民家園での取り組みが日曜日のみの実施であるため、土曜日の来館者も短冊体験を楽しめるように、館内1階には大笹を設置し、その場で願い事を書き、飾れるようにした(図4)。



図4. 2023年度の科学館設置の笹

### これまでの月見イベント

ここでは、これまでの月見イベントについて簡単に振り返っておきたい。

民家園では元々、七夕と同様に年中行事展示の一環として月見の展示を十五夜展示として行っていた。現存の写真記録を見ると、2008年度頃のものがある。当時は子どもの来園者を対象に十五夜の団子作りを一緒に行う有料の申込制ワークショップ「お月見をしよう」をあわせて行っていた(図5)。2017年度頃までこの団子作りワークショップを行っていたが、申込制かつ少数しか参加できないことから、無料で多数の来園者が楽しむことができる「お月見トーク」(後述)へと変更となった。

その他、2016年度のように夜間にライトアップ公開を行う夜間公開の際と重ねて公開したこともあった。その際には影絵などを民家に展示し、月見飾りとあわせて見学できるようにしていた(図6)。なお、2017年度には月見と夜間公開を重ねたうえで、科学館の月見の月観測会を民家園内で行っていた(図7)。こうした科学館との連携事業は2010年度時点で行われていた。

月見イベントも七夕と同様、コロナ禍のあおりをうけ、2020年度は観測会などのイベントは行っていない。その後、2021年・2022年度には科学館・民家園共同でのオンライン視聴コンテンツである動画コンテンツを制作した。2021年度の動画製作を担当した田中里佳・関悦子によれば、コロナ禍で外出が躊躇される状況下であっても楽しめるようにする意図があった(田中・関, 2022)。詳しくは田中・関(2022)を参照されたい。



図 5. 2008 年度団子作りワークショップ  
(お月見をしよう)



図 6. 2016 年度夜間公開時の月見展示

なお、民家園と科学館では2017年度から民家園の民俗担当学芸員・科学館の天文担当学芸員によるトークイベント「お月見トーク」を行っている。民俗担当の学芸員は月見や暦といった要素を、天文担当の学芸員は天体としての月の概要や月に関する最新の天文の話題について30分程度で掛け合いを行いながら話す。

科学館では、「お月見デー」と称し、民家園での夜間公開日に合わせて、特別投影「お月見プラネタリウム」を実施してきた。内容としては、月見の風習、文化、月に関する最新の天文の話題等である。例年人気が高く、満席が続いている。また、2022年度には、生田緑地で実施された十五夜フェスタと同日開催となり、同イベントのステージイベントにおいて、天文担当学芸員が月見についての内容を10分程度話した。



図 7. 2017 年度の月見の月観測会 (民家園内にて)

### 2023 年度の月見イベント

今年度の中秋の名月は9月29日(金)であった。こちらも七夕同様平日のため、直近の

休日として翌日 30 日（日）に生田緑地全体でお月見フェスタが行われた。その一環として民家園と科学館はそれぞれの学芸員が連携して話す「お月見トーク」を行った（図 8）。会場は七夕同様、民家園の北村家である。時間は 15 時～15 時 30 分の間の 30 分間行った。途中の出入りを自由に行っているためズレなどはあるものの、50 名ほどが参加した。



図 8. 2023 年度のお月見トーク（北村家にて）

トピックとしては大きく以下の 4 つに分かれている。(1) 月見の基本的概要、(2) 月の天体的概要、(3) 現代のお月見、(4) 最新の月探査、である。(1)(3) を真保が、(2)(4) を内藤が話す構成となっており、掛け合いも行いながらの進行となる。

このほか、科学館ではお月見プラネタリウムを 16 時 30 分から 45 分間実施した。解説は科学館天文班職員の田中が担当した。また、2022 年と同様にお月見フェスタ内の屋外ステージ演目として、日が暮れて一番星が見える 17 時台に、お月見トークの内容をショート版としてまとめたものを 10 分程度話した。

### 連携により期待される効果

従来、生活をしていくうえでは、人々は事象に対して何らかの学問分野での区分分けを行って、観測をしているわけではない。例えば、月見は月の満ち欠けといった天文学的要素と、それをもとにした暦や年中行事といった民俗学的要素が折り重なるものであり、それを違和感なく受け入れているといえよう。

このように他分野が重なっている事象を、

学問的都合により民俗学・天文学といった分野に切り分けてしまうと捨象されてしまうことがある。そのような本来であれば捨象されてしまうようなことも含め、丸ごとの月見を来園者に伝えることができたのは、他分野連携事業ならではの成果である。

このほか、イベントの時間を調整することにより、科学館・民家園でイベントが重ならないように調整を行うことで、それぞれの館をめぐる回遊性を高めることができたといえよう。

### 今後の課題

これまでも述べてきたように、民家園と科学館は本稿で示してきたような連携事業を行ってきた（田中・関, 2022）。次年度以降も連携事業を継続していくうえでは、以下のような課題が残っている。

1 つ目は、主に民家園に関することであるが、猛暑に対する対策である。民家園は野外博物館であることから、気温・湿度といった環境的要素の影響を受けやすい。七夕当日の 7 月 2 日も最高気温が東京では 31.7 度、横浜では 31.2 度を記録していた。当然のことながら、常軌を逸する気温は来園者や職員の安全にもかかわってくる。夏季における屋外での開催事業をどこまで広げるかは、今後の課題であろう。

2 つ目は、回遊性のさらなる向上である。前述の通り、イベント時間をずらす等により、館園間の回遊性を高めたことは述べたが、七夕事業に関しては、そこまで回遊性を高めることができなかった。イベント終了後の打ち合わせでも連携スタンプラリーの設置の案が提案された。

生田緑地には民家園、科学館、岡本太郎美術館の 3 館が併設されている。七夕・月見にかかわらず土日は 3 館でのイベントの時間同士が重なり合い、結果的に入館者を取り合ってしまうことになりがちである。回遊性を高めるには、イベント開催日時を調整し、3 館同士で回遊していくことができるようにする必要がある。

### 引用文献

田中里佳・関悦子, 2022. 日本民家園とコラボした「お月見動画」の制作. 川崎市青少年科学館紀要, (32) : 47-48.